
白狼

kazuyaX

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白狼

【Nコード】

N3074E

【作者名】

k a z u y a x

【あらすじ】

ある天気の良い日の朝。一時的記憶喪失のコータはあこがれの女性、恵と山荘へ旅行に行く。そこで起こる、ある事件をきっかけにコータは、非常に深くそして大きな陰謀に巻き込まれていつてしまう。深まる謎。また白狼の正体とは？

第1話 始まりの朝

じりりりりりーん

机の上に置いてある昔ながらの目覚まし時計が鳴った。

僕は、体に大きなけだるさを感じつつ、時計をのろのろとした動作で止めた。

今、何時だ……。

時計を見る。

6時半……。

僕は、ゆっくり、ベッドから起き上がり、眠たい目をこすりながら、一つ大きなあくびをした。

そして、カーテンを開ける。

日差しが思ったより強く、一瞬目の前が真っ白になる。

だが、すぐに目が慣れ、外の景色がはっきり見えた。

今日は、快晴だな……。

旅行日和じゃないか。

僕は、じよじよに脳が目覚めていく中で、彼女の事をふと考えて見た。

彼女、名前は恵と言う。

出会ったのは、約1年前である。

その頃、僕は勤務先の事故で、とある病院に入院をした。

僕はその事故で頭を強く打っており、大学時代からの記憶を一切失ってしまった。いた。

それは今でも、戻っていない。

医者に聞くと、どうやら記憶障害以外は特に問題がないらしい。

今は、もう職場に復帰しており、週に一度、病院に通院する程度である。

彼女は僕の担当をしてきている看護婦で、僕の面倒をよく見てくれた。

また、良く僕ともしやべつてくれ、良く笑ってくれた。
ただ、ふと悲しそうな表情を見せる事もあり、それがたまらなく僕
には魅力的に見えた。

時が立つにつれ僕は、彼女の事を意識し始めるようになり

僕は、たびたび彼女に告白めいた事もしたが、ことごとく退けられ
た。

それが・・・

つい1週間前

急に、恵の方から、旅行に行こうと言い出したのだ。

飛び切りの笑顔で恵にそう言われた僕は、彼女の言葉が言い終わる
か終わらないかぐらいのタイミングで

ハイ

と答えていた。断る理由なんて地球をひっくり返しても見当たらな
いと僕は思った。

そうして、僕は、心躍る気持ちでこの1週間を過ごした。

旅行は、一泊2日で山荘みたいな所に泊まるらしい。

そして、今日ついに旅行の日が来た。

そのとき、ふいに携帯が鳴った。

恵からだ。

「ハイ」

「もしもし！コート、起きてんの？」

「ああ、おきてるよ」

「そう良かった。もう後10分ぐらいでそっちに着くよー！」

「そっか、分かった。んじゃ出れるようにしとくよ」

「うん。お願いねー！出なかったらあんたんこのチャイム、あんな
たが出るまで押しつづけるからねー！」

「げっ！それは、やめて！すぐ出るから。」

恵は、きやはたと笑いながら電話を切った。

なんてかわいいやつなんだ・・・

ってそんな事思ってるひまはない。

僕は、ダッシュで、洗面所に駆け込み、顔を洗い、身支度を開始した。

そのとき、ピンポンとチャイムが一回鳴った。

はえーよ！

10分っていったじゃねーか！！

そして、2回目鳴るピンポン

待ってくれ！後は、髪型をセットするだけだから

僕は、鏡の前に向かいながらそう思った。

そして、3回目鳴る。

ピンポン。

続けて、4回目・・・

5回目・・・

うん？音が聞こえない・・・

ま・・・いつか・・・

ちよつとぐらい待たしても

いつも、恵と遊ぶ時は僕が待たされるんだから・・・

僕は、鏡の自分の髪をかき上げながら、顔を右、左と向けて見た。

後、ちよつと口をすぼめてみたり・・・

よし・・・完璧だ・・・

「てか、早く出て来いよ。」

ふいに後ろで声がした。

びくつと背筋に緊張が走った。

嘘だろ・・・。

何で後ろに・・・。

僕は、おそろおそろ後ろを振り返った。

と僕は、見た瞬間に椅子からずり落ちそうになった。

恵！！

そう恵が、後ろに腕組みをして立っていたのだ。

「何してんのよ」

僕は、自分の一番恥ずかしい部分が見られたような気がして

なんとかごまかそうとした。

「え・・・いや、その・・・かつかぎは??」

「空いてたわよ。あんた昨日、鍵しめ忘れたんじゃない?」

うーん・・・どうだったっけ・・・。

そうかもしれないし・・・そうでもないかもしれない・・・。

「もう不用心なんだから」

そういいながら恵は部屋を見渡した。

「で・・・私は待つのが嫌いなんだから、早く行くわよ」

「つておい!いつも遊ぶ時、待たせてるのはどっちだよ・・・

とは、言えず僕は

「ハイ」

と答えた。

かぎの事は置いて、荷物を外へ運び、車へと積んだ。

車は、ピンクの軽の自動車で、いかにも女の子が乗っているというのに

ふさわしい車である。

僕は、車に荷物を載せた後、鍵を閉めにボロアパートに戻った。

そして鍵をかける。

カチッ

??

うん?今鍵をかけるとき、一瞬なんか引つかからなかったか?

僕は取っ手を握って、引いてみた。

鍵は、締まっている。

うーん、気のせいかな・・・?

ま、鍵が閉まったんだから良いか。

どうせ、おんぼろアパートだし、鍵穴にもガタが来てんだろ。

そう思いながら、僕は彼女の待つ、車へ急いだ・・・。

「よし準備おっけー!!」

そう言いながら、僕は、運転席に乗った。

「んじゃ行くぜ」

僕は彼女の顔を見た。一瞬彼女は暗い顔をしたかと思うと満面の笑みで僕に、うなずいた。

なんだ・・・。

少し、奇妙に思いながらも、車を走らせた・・・。

この後、僕は、非常に大きな事件に巻き込まれていく事になる・・・。

今はまだそんな事を知る由もなかった・・・。

第2話 山荘についた

「さあ次の曲を行ってみましょう」

車のラジオから、アップテンポなMCの声が響き渡る。

横では、恵が、すやすやと寝息を立てている。

この車は、彼女の物だが、いつも彼女と乗るときは、僕が運転をする。

やはり、女の子に運転をさせるといふのは、どうも僕の性に合わない。。。。

ふと、彼女の顔を見る。

ちよーかわいい！

僕は、彼女とあつて、一年ぐらいになるが、こうやって彼女が寝ていても二人だけの時間を過ごすのは、すごく楽しい。

事故を起こし、一時的記憶障害という後遺症が残る結果となつてしまったものの、彼女と会う事ができたのは、事故のおかげというのは事実である。

事故以前にも、僕には恋人はいなかった様だし、家族が見舞いに来てくれた時も、彼女の評判はすごく良かった。

つくづく、恵が本当に彼女になつてくれたらなあと思う。

恵は僕の事をどう思ってるんだろう・・・。

今回の旅行で、実は僕は、密かに彼女に告白を考えている。
今までは、中途半端な告白めいた事ばかりをしていたけど
今回は違う。

しっかり、目を見ながら告白をしようと思っている。

告白の言葉はこうだ。

「恵、僕は君を、海よりも深い愛で、包み込みたいんだ。だから僕と付き合ってくれ」

・・・くさい・・・。

我ながら、こんなセリフしか出てこないのが寂しい・・・。
じゃ、こういうのはどうだ。

「恵、君のためなら死ぬる。だから付き合って欲しい」

・・・。

・・・。

ダメ！

僕が、こう言つと多分恵は、じゃあ死んでみてと言つたろう。
なんて僕は、センスが無いんだ。
んじゃこれはどうだ。

「君の瞳は、100万ボルト」

・・・。

・・・。

・・・。

ふー・・・もはや告白じゃない・・・。

そんな事をずっと考えている内に、ナビが目的地周辺の案内をした。
僕は、恵をやさしく起こし、目的地周辺に来た事を告げた。

「うーん。まだ眠いよ」

そういいながら、恵は目をこする。

ああああ、かわいいー！。

普段は強気の彼女も、眠たくて目をこする時は、子猫ちゃんみたいになるんだね・・・

「なによ、その顔、気持ち悪いわよ」

は・・・っ・つい見とれて、にやけてしまった。

「な・なんだよ！もうすぐつくよ。」

僕は、急いで顔を切り替え言った。

そして・・・

ついに、山荘に着いた。

僕たちは、車を降り、荷物をおろし、改めて山荘を見上げた。
でかい・・・。

僕は普通の別荘みたいな物を想像していたのだが

ここは、別荘というよりは、お城に近い。

多分中も相当ひろいだろう。

外側は白く、真正面にある扉はとても大きい。

まるで、中世の映画に出てくるお城のような山荘である。

「はい」

「おばさん！恵よ。ちょっと早いけど、もう着いちゃった」

恵は、いつの間にか、扉の横にあるインターフォンを押し
中の人と会話をしていた。

「ああ！恵ちゃん、早いわねー！ちょっと扉を開けるからちょっと待っててね。」

そういうと、インターフォンからカチャリと音が聞こえた。

しばらくして大きな扉が、大きな音を出しながら外側に開いた。中には、すごくやさしそうな、初老の男女が立っていた。

恵が、その人を見るなり言った。

「おじさん！おばさん！久しぶり」

「おお、恵、ひさしぶりだなあ」

男が言った。

そして視線を僕の方に向ける。

「この方が恵の言っていた、友達の本庄くんかい？」

「うんそうよ」

「はじめまして、恵のおじの白井宗司です。」

そういうと、白井さんは僕に丁寧にお辞儀をした。

僕もあわててドーモと頭を下げる。

「お婆の幸子です。」

次に女の人が、僕に挨拶をしてくれた。

続けて、僕はドーモと頭を下げた。

二人は、笑顔がとても素敵な印象を受ける。

やさしいんだろーな！

「さあさあ、入った。入った」

白井さんが、中に入るように促した。

中は思ったとおり、すごく広く扉自体は建物の真ん中にあるのだが、はしからはしまでは、3、40メートルくらいはあるだろうか。

とにかく広い。

天井からは、豪勢なシャンデリアがある。

「大きいでしょう。」

恵が言った。

僕は、ただただうなずいた。

「ここは、昔、浜田財閥のお屋敷だったの。」

お婆の幸子さんが言った。

浜田財閥・・・

その名前は、よく知っている。

確か、江戸時代末期から

昭和にかけて、栄えた財閥の名である。

教科書では、あまり記載はされてはいないが

歴史マニアの中では、相当有名である。

というのも、浜田財閥自体、外国との繋がりが強く

夜な夜な外国人を呼んでは、盛大なパーティーをしていたらしい。

そのパーティーも普通のものもあれば、かなりアブナイものもあったと僕は聞いている。

また、浜田財閥は、屋敷に地下室を持っており、その地下室で様々な人体実験を行っていたとの噂もある。

そして、第2次世界大戦後、全ての財をそのままにしたままこつ然と姿を消してしまったというのだ。

そういった謎が多い事で、浜田財閥は

歴史マニアの中では、知られている。

どちらにしても気味の悪い話である。

「浜田財閥って知ってる？」

幸子さんが僕に聞いた。

「はい、一応うわさは、よく聞いてます」

僕は、周りを見渡しながら言った。

「そう・・・。噂は大方ホントらしいの。今は、地下室は埋め立てられてもう無いんだけど

こつ然と姿を消したっていうのは本当らしいの。で、私たちは、まあ国との縁があつて、この屋敷の管理を任されてるんだけど、毎年この時期になると、一ヶ月だけ一般開放するの。それで、大学のミス研とか、歴史好きな人たちが、ここへ、泊まりに来るの。浜田財

閤の謎を解きにね。今年も、12名の方が今日泊まりに来る予定よ。

そこで、幸子さんは、話をやめ歩き始めた。

「恵たちの部屋はこっちょ」

幸子さんが歩きながら言った。

僕と恵は、急いで、幸子さんの後に続いた。

その時・・・。

・・・。

今確実に、扉の横に立っている西洋の騎士の鎧の目元辺りが光った。

うん・・・？。

僕は、幸子さんの後ろを歩きながら、その騎士の鎧を見ていた
が結局、僕達が、一番壁側にある階段を上るまで、特に変わりはない
かった。

その後、僕達は部屋まで案内され、幸子さんはお昼ご飯は12時だ
からと告げ

そのまま、部屋を出て行った。

部屋は、恵と別々である・・・。

まあ当然といえば当然だけど・・・。

一緒だったら・・・ムフツ

そんな事を考えていると、恵が部屋をノックした。

「ちよっと散歩に行かない？」

「うん」

そして、僕達は山荘の近くを散歩した。

今日は、天気も良く散歩してるととても気持ちいい。

近くに小川があった。そこで僕達は少し立ち止まり川を、なんとなく眺めていた。

今だ・・・。

今が告白のチャンスだ・・・。

言うぞ・・・言うぞ。

言うぞ！！

「恵・・・実は、俺、お前の事が好きなんだ・・・だから、もしよかったら付き合って欲しいんだけど・・・」

恵は、僕を見ながら、一瞬度肝を抜かれた顔をしたがすぐに顔を伏せた。

そして・・・

「いいよ」

何・・・。

僕の鼓動が一瞬にして、ボルテージを上げる。張り裂けそうだ・・・。

恵が目をつむる。

え・・・何・・・キ・キス？

そして僕も、目をつむ・・・。

「あんだ、一人でなにしてんのよ」

え……。

「げ……また妄想しちゃった。」

「急に遠くを見つめ出して、目をつむるんだから」

「言わないで!!」

「言わないで!!」

「すげー恥ずかしい!!」

僕は、顔がすごく熱くなるのを感じた。

その時、

「おお、恵!!」

という声が近くから聞こえた。

「信二兄ちゃん!!」

恵が男の姿を捉えると言った。

男は、こっちを向きながら手を振っている。

恵は、信二兄ちゃんと呼ばれた男の方に向かっていった。

僕も、後を追う。

男の人は、見るからにスポーツマンといった画体をしており

顔もかなりの男前である。

また髪の毛も短く刈り込んでおり

一目見ただけで、好印象を与えるだろう。

実際、僕も、この人を見たとき、負けたと思ってしまった。

「恵、この人は?」

「この人は、私の友達の本庄コータよ」

「はじめまして。僕は恵のいとこの白井信二です」

と言いながら、軽く、会釈をした。

僕もあわてて、挨拶をする。

その後、3人で話し込んだ。

信二さんはすごく、話も面白いし、顔もいいし、さぞもてるんだろ
ーなーと思いながら

僕は、話をしていた。

そうこうしている内に、昼飯の12時になり、僕達は山荘へと足を向けた。

第2話 山荘についた（後書き）

これから物語は、様々な展開を見せていきますが、もし、よろしければ感想などを頂ければ幸いです。

第3話 食卓にて

僕達は、お昼を食べるために、山荘の食堂に入った。

そこも、やはりすごく広く、大きなテーブルが真ん中にドンと二つあった。

そこで皆が、食事をするようだ。

そこには、僕ら以外の8人が席についていた。

「恵、あんたたちが最後よ、早く席について」

幸子さんは、いそいそと食事を運びながら言った。

僕達は、言われるがままに、若い眼鏡を掛けたいかにもオタクそうな人の隣に腰を掛けた。

その人は僕達をちらちら見ている。

何だってんだ。

僕も、その人を見た。

すると、その人は、ビクッとしたかと思うと、横の仲間らしい二人（これもオタク系だが）になにやらこそこそ話をし始めた。

気持ちわりーな！。

こんな奴らは相手にしないのが、一番だな。

ふと、ななめ前を見ると、すごい綺麗なお姉さんが座っていた。その人も横の人と話をしている。横の人は、少しぼっちゃり系で、かわいらしいという印象を持っている。

ぼっちゃり系の横の人も、多分、綺麗なお姉さんの友達なのだろう一緒にあって、話を聞いている。

その人は、切れ長の目をしている。

背は低いが、少し、きつそうな印象を受ける。

綺麗なお姉さんは正直、この山荘の印象とは似合わないような気がする。

この人も、浜田財閥の謎を解明するために、ここに来たのか？
いろんな人がいるもんだ。

僕は、漠然とそう思いながら
目の前に食事が運ばれてきたので
それを食べた。

恵は、僕の横に座っている。

信二さんは、幸子さんを手伝っているのだろう。
食事を運んでいた。

その女の三人衆の左横、つまり、僕達の正面には
多分夫婦だと思うのだが

初老の男女が座っていた。

男は、室内なのに帽子をかぶっている。

その横の女の人は、教育がいいのかすごい丁寧に食事をしている。

男が何か、しゃべっても

ええとか、はいとかいっているだけだ。

すると唐突に、その帽子をかけている男が話しかけてきた。

「君達も、浜田家の謎を解きにきたのかい」

僕は

「いえ、ただ単に旅行で来ただけです。横の彼女のおじとおばがこ
このオーナーをやつてまして」
というと

一瞬にしてみんなの目が僕に集まった。

え・・・別に、そんなヘンな事を言つたつもりはないんだけど・・・
すると、斜め前の綺麗なお姉さんが話かけてきた。

「え・・・そうなんです、じゃあここの謎には興味はないんです
か？」

「そついうわけじゃないんですけど」
と僕は言い、恵の方を見た。

恵は、すごい目で僕を睨んでいる。
げ．．．なんだよ！その目は！！
その時、ナイフに僕の顔が反射した。

そこには異様な笑顔を放つ僕が居た。

う．．．ばつちりでれでれしてるじゃねーか！
これを見て恵は僕を睨んだのか．．．。
それにしても自分が見ても気持ち悪い。
そして、僕は、きゅつと顔を引き締め言った。

「お姉さん方は、浜田家の謎を探りに？」
と言うと

お姉さんはちよつと微笑みながら
「ええ、そうよ」
と言った。

大学を出て就職をして、一年半ぐらいの僕とは
やっぱり全然違う。

はああ、綺麗だなあ。

「多分、ここに居る人で、ただ単に旅行だけっていう人はあなた達
ぐらいだと思うわ。」

とおねえさんが言った。

そうだったのか。

「でも自然はすごい綺麗だし、近くには、温泉もあるって聞きましたよ。」

僕は言った。

「確かにそうね。車でちよつと行ったところに、いい温泉があるわよ。」

そこで、綺麗なお姉さんは、一息ついた。

「でも・・・」

うん・・・？

でも？

僕は、一瞬不気味な気分になった。

「ここから出れたらね」

・・・？

・・・？？

冗談か？

いや違う。

綺麗なお姉さんは本気で言っている。

冗談ならもっとテンポが軽快なはずだ。

「ど・どういうことですか？」

僕は、動揺を隠しながら言った。

そして、横のぽっちゃりした女の人が言った。

「そんなに神妙な顔しなくてもいいわよ」

そういつて綺麗なお姉さんを見ながら言った。

「玲子の言い方が悪かったんだから。」

玲子と呼ばれた綺麗な人は僕を見ながら、肩をすくめ少し、お茶目な顔をした。

き・・・き・・・きれいだ・・・。

なんてきれいなんだ・・・。

僕は、君と出会ったために生まれてきた・・・。
かもしれない・・・。

いかんいかん！！

僕には、恵がいるじゃないか。恵を捨てるわけにはいかん！！

断じていかん！！！！

ちらつと恵をみる。

うわー！。

すごい目で僕を見てるよー！！

それ以上見ないで、穴が空きそうだー！！！！

違うんだ。顔は、にやけてても心は恵のものだよ……。

って説得力ないか！！

その時、目のきつい女の人が静かに言った。

「出れなくなるって言うのは本当よ。」

その声は、静かだったが、どこか威圧するような感じを受ける。

すると、隣の眼鏡の男が言った。

「通称、陸の孤島というんだよ。けけ……。」

君は、言い方が気持ち悪いんだよ！！

猫背だし！

猫背は関係ないか！！

そして、目のきつい女の人が静かに言った。

「ここは、浜田財閥の屋敷だったってのは、聞いていると思うけど、実はそれだけじゃなくて

ここは、四方八方がけに囲まれた土地なの。あなたたちが来た時、大きな橋を通ったでしょ。」

僕は、来た時の事を思い出す。

確かに、橋を通っていた。

確かそこから、ずっと一本道がこの館までつづいてたんだっけ……。

ここまでは、橋を渡ってから、約10分ぐらいだったかな。

僕は、こくつとうなづいた。

「実は、ここから、来る道も帰る道もあそこしかないの。」

・・・

・・・

なにー！！

そんな辺鄙なところなのか。ここは。

「でも、なんでこんなところに屋敷なんかつくったんだろ」と僕が言うと

正面の帽子のおじさんが、言った。

「それが一つ目の謎なんだよ」

僕は、そのおじさんを見た。

そのおじさんは、つまみ型の中折れの帽子から目をのぞかせた。

意外と目が鋭い……。

今まで、気付かなかったが、その目は、僕がぞくつとするほど鋭い。

話のせいもあるかな……。

そして、話を進める。

「しかも、その橋は、午後5時になると、向こう側に上ってしまうのだ。」

え・・・？

今！

午後5時になると、向こう側に上ってしまうって言った？？？

そんなの聞いてないよー！

おじさんは話を進める。

「だから、行き来出来るのは、また、橋が下りてくる朝9時から午後5時までしかないのだ。今は、我々のような謎を追いかける者達の雰囲気上げるためにそういった趣向を凝らしているのだそうだが、昔は、浜田家当主の一郎が、お手伝いと共に、午後5時になると橋をあげていたそうだ。」

「な・・・なんでそんな事を・・・」

僕が一番疑問に思った事を言った。

「わからないの・・・」

すかさず、綺麗なお姉さんが言った。

うん・・・君はきれいだね・・・。

話に全くかんけーないじゃねーか！

僕は、にやける顔を直しながら玲子さんに言った。

「てことは、お姉さんがさっき言った事はこういう事だって事ですか？」

「玲子でいいわよ。」

と玲子さんが言った。

ドキッ・・・。

一瞬心臓がぞくつとするほど、色っぽく聞こえた。

れ・・・れいこさん・・・。

ガツッ

いて！

恵ー！ひじはやめてくれよ！

僕のわき腹に見事に恵のひじが入っている。

違うよ。

僕は恵だけだよ！

って、こんなに自分でも分かるほどにやけてたら説得力ないか。

もしかして、嫉妬・・・？？？？

そんなに嫉妬しなくてもいいんだよ。

僕は、恵のものだから・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

きもい・・・。

「そうよ。だから、ここに閉じ込められるって意味で、さっきは出られないって言ったの」

玲子さんが言った。

「そういう意味だったのか」

僕は、神妙そうになづいた。

だが、そんなに僕自身大した事だとは特に思っではいなかった。

「そうそう、自己紹介がまだだったな」

唐突に前のおじさんが言った。

「まあこれから1泊一緒に過ごすわけだから、名前ぐらいは、知つといた方がいいだろ」

といい、おじさんは一息つき名前を言った。

「俺の名前は、黒川銀二だ。よろしく。」

それを皮切りになんとなく、自己紹介が始まった。

隣の綺麗なお姉さん3人衆は、

綺麗なおねえさんが

峰塚 玲子

そして、ぼっちゃりの女の人が

木田 夕子

目のきつい女の人が

城田 加奈

で、僕達の正面のおじさんたち

おじさんの名前は、さっき書いたように

黒川 銀二

横の清楚な女の人

黒川 妙子

やっぱり夫婦だったのだ。

横の、まあ僕にとってはどうでもいいが

オタク系の奴らの名前が

一番僕に近い眼鏡は

浦井 裕也

真ん中の眼鏡は、

河合 喜一

一番向こうの眼鏡は

平井 太一

と言うらしい

そして僕達も、自己紹介を行った。

自己紹介を行ったことで、少し親しみが湧いたのか
砕けた感じで話が弾んだ。

玲子さんたち3人衆は、みんな同じ高校の同級生で、年は27歳。
僕よりは、3歳年上にあたる。

ここの浜田家の秘密や、黒川さんの今まで歩んできた人生などを聞いた。

食事の後片付けが終わると、白井さん夫妻と信二さんも入り話が弾んだ。

後4人泊まりに来る予定らしいが、どうやら、今日の夕方4時ごろ到着する予定だそうだ。

そうして、僕達は、浜田家の謎を中心に話を続けていった。

そして、14時半ごろ・・・

皆は、それぞれの仲間とともに

浜田家の謎の探索に、乗り出した・・・。

第3話 食卓にて（後書き）

少し仕事が忙しくて、中々小説がすみませんでした。多分内容にも少し雑な部分がでてきているかも知れませんが、今後は、そういうところに気をつけてがんばっていかうと思っておりますので、どうぞよろしく願います。感想などありましたら、記入して頂ければうれしく思います。

第4話 部屋にて

「じゃあ恵もここが浜田家の屋敷だって知ってたの？」

僕がベッドに腰をかけながら言った。

「うん」

恵は、部屋にひとつしかないイスに座り、こっちを向いている。

窓からは、日差しがやさしく部屋を照らしている。

僕たちは、お昼を食べた後、みんなと別れ僕の部屋でしゃべっていた。

「でも私は、謎にはあまり興味ないの」

「え・・・そうなんだ。んじゃあなんで僕をここに連れてきたの？」

僕は、食事のときからずっと思っていた疑問を言った。

彼女は、少しとまどった表情をみせ、そのあと、笑顔になりこう言った。

「ちょっと気分転換にいいかなって思って・・・。しかもいつもコートから遊びに誘ってくれるじゃない。だからたまには、私の方から誘ってもいいかなって思って・・・。でも私、仕事柄世間の事に疎くて、気分転換になる場所とかあまり知らなかったの。でここを選んだってわけ」

と笑顔で恵は言った。

ふーむ

本当にそうなのか・・・。

なんか腑に落ちない。

まず、どれだけ場所を知らないと言っても

わざわざ、こんなところに連れてくるだろうか。

それから結局、僕たちは、午後5時から外に出て何もできないというのに

そんな状態で、気分転換などできるというのだろうか。

また、時期も時期だ。

なぜ、今なんだろう。

僕たちの他に、12人もいる時を選んで。

仮に今回がたまたま12人も宿泊する予定だったとしても、今が、一般開放できる1か月だったとしても、なぜこの時期にこんな変わったところに来たのか……。

それはやはり、気分転換という理由だけでは、なんとなく片付かないような気がする。

僕の直感が、ガンガン伝えてくる。

何かある。と……

「僕を、ここに連れてきた理由は、本当にそれだけなのかい？」

僕は、恵の目をじっと見ながら言った。

「うん、そうよ」

彼女も僕をしつかり見つめ言った。

僕は、それ以上彼女を問い詰めることをしなかった。

特に、今は何が起きているわけでもないし、そうする理由も見当たらない。

しかも本当に、恵は気分転換に来ているだけかも知れない。

「信じてくれないの？」

恵は少しさみしそうな顔をした。

日が、恵の顔をやさしく包んでいる。

きれいだ……。

僕は、その光景に一瞬、我を忘れそうになりながら言った。

「いや、そういうわけじゃ・・・」

「んじゃあ信じて」

恵は急に笑顔になり言った。

「うん」

僕は言った。

今考えると、そんなに不信感を持たなくてもいいような気がする。

恵は、本当に好意で誘ってくれているのかもしれないし

もし、何かあったとしても、それが僕の命に関わるような大きな事に繋がる事はないだろう。

そんなことが起こるのは、映画の世界の話だけだと思う。

ここは現実世界だ。

そんなことは、起こるはずがない。

少なくとも、日本の平凡な僕の周りでは・・・。

話に間が空いた。

ふと彼女を見る。

すごく、形のいい唇に、整った輪郭。

きりっとした目が、一見きつそうに見えるけど

実は、話すとかなり気さくである。

僕は、そういう恵の魅力に加え

時々ふと悲しそうな顔をする所にもすごく魅力を感じている。

僕は恵が大好きだ。

「ねえ・・・。コータは私のことどう思ってる？」

急に、恵がそう言ったので

僕は一瞬彼女が言った言葉を理解できなかった。

「どうつて??」

僕は、少しだけ何故か鼓動が早くなるのを感じた。

「うーん。だからー。なんていうかー。」

彼女が考えている。

「そうねー。私達知り合って1年ぐらいじゃない」

「うん」

「色々遊んだりもしたけど、私はコータの事を頼りにしてるし、はじめは、そんなにだったけど、どんどんコータの存在が大きくなってきた感じ。」

・・・。

もしかして・・・。

もしかして・・・。

もしかして！

もしかして!!

僕に告白?????

顔が熱くなっているのを感じる。

やばい！

鼓動がすげーはやい!!

ついにくるのか!!

しかも彼女から!!!

そして恵が静かに口を開く・・・。

カモーン!!!

「友達としてね」

・
・
・

・
・
・

・
・
・

・
・
・

ふー・・・。

・
・
・

・
・
・

・
・
・

一度、死ぬかい???
恵ちゃん。

「何顔赤くしてんの？」

あんたのせいだろ！

ふつーあんな事言われたらドキドキするだろ!!

「で、コータはどうおもってんの？私のこと」

くー!!人の気もしらないで!!

!!!!

そうだ!!

ここで、告白しよう!!

今ならベストタイミングじゃないか!

誰もいないし、私のことをどう思ってるのと聞かれている。

さあ・・・。

言うぞ!!!!

ついに・・・。

言うぞ!!!!

「ぼ・・・僕は恵の事・・・」

「恵居るー???」

えーーーー!!!!!!

ベストタイミングで幸子さん登場かよ!!
しかもノックなしだぜ。

ここには、プライバシーもないって事ですか!!
ねえ幸子さん!!

ちよつとぐらい僕に告白の時間をくれてもいいんじゃないんですか
!!!!

「やっぱりここにいたんだ」
幸子さんが、言った。

「うん。どうしたのおばさん」

「ちよつと手伝ってほしいことがあつたの。よかつたら今来てくれない」

今????

今はいいとこだつたん……。

「いいよ」

えー！ー！！

恵！！

今いいとこだつたじゃないか！！

「ごめんなさいねー！。たのしくお話をしているとところに水を差しちゃつて」

幸子さんが申し訳なさそうに僕に言った。

僕は、出来るだけ笑顔で言った。

「ベ……別にいいですよ」

「そう。ありがと！」

そう幸子さんが言つと、恵の方を向いた。

「じゃあちよつと来てくれる？」

「うんわかつた！！」

そして手を上げ、恵は僕の方を向いた。

「んじゃ、また後でねん。ばいばい」

そついつて手を振つた後、部屋を出て行つた。

僕は、あつけに取られていた。

なんだそりゃ！！！！

なんなんだよ！！この寸劇は！！！！

僕のドキドキを返してくれ！！！！！！！！

僕は、少しの間、ぼーっとさつき恵と幸子さんが出て行ったドアを見つめていた。

そして、ふーっと一息つき、ベッドに寝転んだ。

天井が見える。少し、くすんでいる。

やはりかなり年季が入っているのだろう。

ところどころ、真っ黒になっている箇所がある。

浜田財閥か・・・。

僕は漠然と思った。
確かに謎だらけだ。

まず・・・。

第1に、何故彼はこんな場所に屋敷を建てたのか？

第2に、何故午後5時になると橋を通れなくしていたのか？

そして、第3に地下室で行われていた、人体実験とは一体どういうものなのか。

第4に、彼は特に、外国と交友があつたわけでもないのに、外国人を招待してのパーティーを行っていた。

第5に奥さんの変死・・・。

第6に全てをそのままにしてこつ然と消えた理由・・・朝食もそのままだったらしい。

数え出すときりがない。

ふー・・・。

僕は一息ついた。

別にどうでもいい事だけど・・・。

そうして、静かに目をつぶった。

・・・。

・・・。

・・・。

・・・じじじ・・・。

じじじじじ・・・。

遠くから音がする。僕は、静かに目を開けた。
なんかだるい・・・。

そして目をこする。

うーん、寝てたらしい。

遠くから地響きみたいな音がする。
窓を見ると少し日が傾いている。

そして・・・

ズーン。

一度、大きな音がしたかと思うと
音が完全に止まってしまった。

そして、なんとなく腕時計を見る。
そこで、僕は、気付いた……。

橋か……。

そう、橋が上つてしまったのだ。
今は、午後5時4分……。

これで、僕達は、明日の朝9時までには、ここから出れない。

もう皆きたのかな？

お昼の時には、宿泊する予定の4人がまだ来てなかったようだが
もう来たのかな。

窓から外を見てみる。

僕達の車以外に6台止まっている。

仮に、白井さんの車を含めグループ1台と考えると、1台多い計算
となる。

しかもさっきまでは止まっていなかった大きなワゴンが止まってい
る。

来てるみたいだな。

僕は、そっと窓から離れた。

そして、さっきまで恵が腰掛けていた椅子に座る。

なーんかひまだなー。

机に片肘を付き、なんとなくここに来た時の事を考えてみた。
そして……。

ナイトの事を思い出した。

あの時、入り口付近にあるナイトの鎧の目元あたりが、確かに光っ
た。

それは、間違いない。

それも、浜田財閥と関係があるのかな？

ふと、腕時計を見る。

夕飯は6時30分からだ。

まだ時間はある。

ちよつと見に行ってみるか。

そんなに、浜田財閥に興味があるわけではないが、なんとなく気になる。

そうして、僕は、部屋を出た。
階段を降り、玄關口に向かう。

途中は、不思議と誰とも会わなかった。
そして……。

ナイトの前に来た。

さあ……ナイトの目元の光の謎を解かせてもらおうか……。

僕は、そつとナイトのかぶとに手を掛けた……。

第4話 部屋にて（後書き）

カズヤックスです。今回から少しづつ謎が明かされまた新たな謎が発生したりします。乞うご期待ください。、また感想などありましたら、どんなものでもいいので頂ければ幸いです。

第5話 廊下にて

・ ・ ・
・ ・ ・
・ ・ ・

さあ、ナイトの仮面を取るぞ。

その時

「本庄君じゃないか。そこで何をしているんだい」

白井さん・・・？

後ろから白井さんの声がする。

僕は、おそろおそろ振り返った。

すると、少し息を弾ませている白井さんがそこにいた。
げ・・・どうしよう・・・。

しっかり手は、ナイトの兜にかかったままだ。

「このナイトの兜はかっこいいなあって思ってみてたんです。」

う・・・我ながら、かなり苦し紛れだ・・・。

そうして、ナイトの兜を右左に動かそうとした。

すると、

「いかん、いかん！」

と白井さんがすごいスピードで僕の手を取った。

僕は、その行為をあっけに取られながら

見ていると

白井さんが言った。

「すまん！このナイトの置物は古くてなー。触るとすぐに、倒れて

しまうんだ」

「そうだったんですね。ごめんなさい。つい」

「いやあ。いいんだよ。これから気を付けてくれたら」

白井さんはナイトの置物を少し用心深く見ながら髪をかきあげこちらをみた。

「ふー。そーいーもうみんな来てるよ」

白井さんは、ひと息つきながら言った。

みんなというのは、お昼にきてなかった人の事を指しているのだろ
う。

「そうなんですね。」

僕は白井さんを見た。

少し、額がきらきら光っている。

うつすらと汗をかいているようだ。

「恵たちはどこに行っただんですか？」

僕は聞いた。

「恵と幸子は、夕食を作り厨房にいるよ」

「信二は、どこに行っただろう。みかけないなあ」

そう言っつて、少し首をひねった。

「他の、みんなは、まだ謎探りをしているんじゃないかなー」

「そうなんですねー」

そう言っつて、ふとナイト脇の窓から外を見た。

そこには、かなり背の高い、ひよろつとした男がレンズの大きい力
メラを

上に向け、こちらの方を向きながら、仕切りにシャッターを下ろし
ていた。

「あの人は？」

白井さんが、窓に近づき外を見た。

「ああ、あの人は遅れてきた人達の内の一人だよ」

そう言つて僕の方を向き、続けて言つた。

「どっかのミステリー雑誌の記者らしい。あと他の3人も一緒だよ。浜田家の謎の特集をやるんだって。そんなにたいそうなものではないと僕は思ふんだが・・・」

ふーん

僕は窓から、目を離した。

その時、廊下の向こうの階段から、メガネ三人組が降りてきた。

「ここがこうで・・・」

「違うよ！これは、こうだよ」

と三人は話したまま近づいてくる。

「どうですか。なにか謎はわかりましたか？」

白井さんが声をかけた。

声をかけなくてもいいのに・・・

「そうですねー！。今すごい仮説がでてきたんですよ！で、これからそれを証明しに書斎に行くとこなんですよ。」

「そうなんだー。どんな謎なんだい？」

白井さんは興味をそそられたようだ。

「今は、まだ言えないんです。」

もったいぶるなよ！！

と僕は、叫びたかったが、そこは特に気にするわけでもなく

少し、興をそがれたような気分になり自分の部屋にもどろつかないと思つた。

そのまま、メガネくん1号2号3号と白井さんが話している間に、玄関の門が開いた。

西陽が差しこんでくる。

すごく長い人影が、廊下に映り壁にまで延びていた。

「こんにちは！」

僕は、声をするほうを見た。

陽が目に入る。一瞬、目を細める。

よく影で、顔が見えない。ただ、肩から大きなカメラをぶら下げているのはわかった。

「こんにちは」

僕は、手を目の上にかざしながら言った。

「おっとごめんごめん。まぶしいよね」

そっぴいながら扉を、閉めた。

改めてこう見るとでかい。

190以上はあるだろうか・・・。

顔立ちは、少し、頬がこけているが、気さくな話やすそうな人だ。

「僕の名前は、村木正治です。よろしく。」

そっぴいつて僕たちに、笑顔をみせた。

すかさず、白井さんが、僕たちの紹介をしてくれた。

「この右にいる方が、本庄 孝太くん」

そして、今まで話していた、メガネくん3人衆のことを指しながら

「で、こちらが、大学のミス研の 浦井裕也くん。平井太一くん。

河合喜一くんです。」

ぼくら4人はほぼ同時に軽く頭を下げた。

「へー、君たちミス研なんだー」

あきらかに僕も一緒にされてないか??

「いえいえ！僕は、ちがいますよ。」

「そっぴなの？」

「僕は、白井さんの姪御さんと友達で気分転換に旅行に來ただけなんです。」

「あ、そっぴなんだー。んじや君は、ミス研じゃないんだね。僕は、月刊歴史ミステリーという雑誌の記者をしているんだ。よろしくね」
そっぴ言つて、村木さんがカメラを抱えた。

「一枚記念に撮つとこっぴか??」

そういつてなれた手つきでファインダーを構えた。

シャッターが、1度、2度と押された。

「あとで、現像したら、あげるよ」

「はい！お願いします。」

浦井くんが言った。

その後、村木さんは、少し話をし、2階の自室へ戻って行った。

「んじゃ僕たちも書斎にいきましょうか」

平井くんが言う。

それから、浦井くんと河合くんがうなづき三人は、書斎の方へ歩いていった。

僕と、白井さんも、そこで別れた。

とりあえず、また部屋で、ぼーっとしとくか・・・。

そう思った僕は、ゆっくりと階段の方へ歩いていった。

廊下の端の階段を上り、部屋まで歩いた。

そして、鍵を開けるため鍵を取り出す。

うん・・・？

隣の部屋からなにやら声がする。

確か、僕の部屋の横には、恵がいる。

そして反対側には・・・。

黒川さんだ・・・。

僕は、興味本位で、少し聞き耳を立てた。

中から声がする。

「……だから俺には、秘密なんてどうでもいい……。」

「ええ、それは分かってます。」

「お前は、俺にしたがっておけばいいんだ……。どうせここから出たら赤の他人なんだからよ」

「そうですね」

……。

何……？

どういう事だ……？

離婚のことなのか？

だがそれなら、俺にしたがっておけとはどういうことだ？

黒川さんの言い方が、全然旦那さんっぽくない

言うなら、突然組まされたチームみたいだ。

しかも、今回だけの……。

まだ、中で話しは続いている。

「今日か、明日中には、必ず白狼を確保せねば……。」

白狼……？

「そうですね。」

「今日は必ず、白狼が来る。これは、確かな筋からの情報だからな。だが……。」

そこで、一旦黒川さんは一息ついたようだ。

「誰が白狼なんだ……。」

……。

……。

・・・。

この人たちは、一体何を話しているんだ。

全く分からない・・・。

話が、全く別の次元のものに聞こえる。
まるで、何かの仕事で来ているようだ。

ただ、今の時点で分かっていることは
黒川さん夫妻は、浜田家の秘密を追っているのではないようだとい
う事。

そして、白狼・・・。

話からして多分人だろう。

その白狼を捕まえようとしているという事。

という事は・・・。

僕達がお昼に食卓を囲んで話していた事のうち、浜田家に興味があ
るっていうのは

嘘だっただけか・・・？

何故、そんな嘘を・・・？

何者か分からない白狼に疑われないようにするためか？

その時・・・。

ドアが開いた。

「ああ。本庄くんじゃないか！どうしたんだこんなところで。」

やばい……。

一瞬にして、僕の顔に汗が浮かぶのが分かる……。
どうしよう……。

「いやー、部屋に入ろうとして鍵をここに落としてしまつて
といい僕は、廊下の隅を指差した。」

「もう鍵は取つたんですけどね」
と苦し紛れに鍵を見せる。

「実は僕の部屋はとなりなんです。」

「そうだったのか。横が、君の部屋だったんだな。」

「そうなんですよー。んじゃ、また後で、夜ご飯の時にでも
浜田家の秘密の事について教えてくださいね」

そういつて、逃げるように部屋に入った。

ばたん……。

ふー！。なんとかしのいだか？？

外から、声が聞こえる……。

「……。本庄くんか……。

彼は嘘をついているな……。」

！！！！

なにー！！

ばれた！！！！

一瞬にして、心拍数が上がる。

「じゃあ私たちの話を聞かれたのかしら？」

「ああ……。たぶんな。」

そう言つて、少し間があり

「まあ……。いいだろう……。彼が、俺たちの邪魔をするとは思
えん。」

そう聞こえると、部屋のドアを閉める音が聞こえた。

二人とも部屋に戻ったのか……。

なんだつてんだよ！！

本当に！！

今日はやたらとヘンな事に気が付くじゃないか！

そついつて、僕は、窓から外を見た。

・
・
・

・
・
・

・
・
・

一体何が起ころうとしているんだ……。

第5話 廊下にて（後書き）

かなり更新が遅くなってすみませんでした。これから物語は佳境に入っていきますので乞うご期待ください。

第6話 夕飯前（前書き）

更新が非常におそくなりすみませんでした！！仕事もひと段落したので今後は、随時更新していけるかと思っています。では、よろしくです。

第6話 夕飯前

一体何が起ころうとしているんだ……。

僕は、窓から外を見ながら、そう思った。

窓の外には、木田さんと信二さんが話しているのが見える。

そして、見た事がない男女2人が、信二さんたちと少し離れたところで

きれいなお姉さんこと、玲子さんと瀬戸さんと話している。

男女二人は、しきりにノートで話の内容を記入しているようだ。

多分取材かなんかだろう……。

僕は、窓から目を離し、携帯を手にとった。電波は、3本立っている。

少しインターネットを見てみよう……。

そう思い、インターネットを開く。そこには、様々な情報が飛び交っており

僕は、適当に今日のニュースなどを見た後、ネットを終えた。

でも……。

気になる……。

白狼……。

そうだ。ネットで検索してみよう。

そう思いまた携帯でインターネットをみる。

まあ、こんなもので分かりはしないとは思うが・・・。
見ないよりはいいだろう。

案の定、めばしいものは見つからなかった。

再び、ネットを閉じ、携帯をベッドの上に投げた。

ふーひまだ。

ちょっと、厨房まで行って、夕食の手伝いをするか・・・。

僕は、厨房に向かう事にした。
扉をあけ外に出た。

先ほどのやり取りが少し思い出されたが特に気にせず
階段を下った。

そうして、入り口の脇のナイトの前を通りすぎる。

また、ナイトの目が一瞬光った。

だが今度は、僕は気付かないふりをし、そのまま厨房へ向かった。
途中、眼鏡3人組とまたすれ違った。

なにやら熱心に、書類をみている。

僕は、どもと頭をさげ、立ち止まらずにそのまま厨房に向かった。
3人も特に僕に気を使っわけでもなくそのまま、立ち去った。

厨房では、恵と幸子さんがなにやらせつせと料理を作っていた。

「あら、コートどうしたの??」

恵は手を腰に掛けたエプロンで拭きながら言った。

「いや、なんか手伝う事でもあるかなと思って」

僕は、周囲を見回しながら言った。

「うーん、もうすぐ終わりなんだけど・・・。」

そういつて、恵は少し考えて言った。

「んじゃあ外に、信二兄さんがいるから、信二兄さんの手伝いをしてくれる？」

「ああ分かった。」

そっくり僕は、ゆつくり外へ向かった。

外には、信二さんと、木田さんがまだ話していた。

「こんにちは」

と声を掛ける。

「そうなんだー。信二さんは、昔、サッカーをやってたんだー。なんかっこいい！」

木田さんは、信二さんにそっくり、僕の方を向いた。

「あら、こんにちは！」

木田さんは、笑顔で挨拶をしてくれた。

「こんにちは」

信二さんが続く。

やっぱり男前だ。

少し、微笑むだけで、なんと男前オーラが出る事か……。

木田さんもこれにやられたのかも。

じゃっかん、木田さんの目がきらきらしているようにも見える。

「んじゃ、そろそろ私は、玲子たちとこにいこうかな」

木田さんは、そう言い、信二さんの目を見ながら

「また後でね」

と言った。

信二さんは、一瞬険しい顔をしたかと思うとふっと表情を和らげ

「ああ」

と言った。

僕は、木田さんに少し頭を下げ、見送った。

「どうしたんだい。本庄くん。」

「いやー。なんかひまでー。手伝えることないかなと思って……」

「そっかー。そうだなー……。」

信二さんは頭をかき、少し考え言った。

「んじゃ、これを片付けるのを手伝ってくれるかな」
そう言つて、信二さんは足元の機械を指して言った。

「はい」

僕はそういい、それを持ち上げようとした。

うう……。結構重い……。

「おいおい！大丈夫かい！」

「大丈夫です」

僕は、苦悶の表情を浮かべながら言った。

信二さんは少し、にこつとほえみながら

んじゃ僕は、向こうの機械を片付けておくからと言い、遠くにある
機械の方へ向つた。

これは重いぜー！。

どんどん腰が痛くなってる。

僕は、なんとか、山荘の物置に機械をいれた。

ふー！。

一度、ぐーっと腰を伸ばす。

その時、物置の奥から、なにやら、金属音が一定の間隔でしてきた。
カンカンカンカン……。

うんなんだ……？

一定のリズムで金属音が鳴る。

僕は、そちらの方に顔を向けた。

音をする方には、壁しかない。

壁から？

僕は、壁に近づいた。

音は壁の中からだ……。
なんの音だ……。

耳を近づける。

カンカンカンカン……。
やはり壁の中からだ。
そっと壁に触れる。

すると、金属音がふいにやんだ。

なんだ？

僕は少し首をかしげその場から離れた。

外では、信二さんが機械を重そうに運んでいる。

金属音は、何かの機械の音だろう。

ここは、物置きだから、壁が薄いのかも

僕は、音の事を特に気にすることなく

信二さんが今、一生懸命運んでいる機械を運ぶのを手伝った。

どうにか二人がかりで、機械を倉庫に収め、一息つき

信二さんと少し話した。

淡々と時間が過ぎ、僕達は、話に花が咲き時間を忘れるように話した。

信二さんは、とても話し上手で、すごく面白い。
さぞもてるんだろーな！。

「信二さんって結構もてるでしょ。」
僕が言った。

すると信二さんは、少しとまどった表情をしながら言った。

「そ、そんな事ないよ！昔から僕は全然もてないよ。何でだい？」

「いやー。すごい話しがおもしろいなあって思ってた……。」

「そうかい？。それはありがとう。本庄くんも、十分もてそうだよ。

恵も……。」

そう言つて、信二さんは話をやめた。

……。

……。

……。

すげー！。

気になる……。

気になる！！

恵がなんか言つてたんですか？？

つて聞きたくなる……。

その時、ふいに信二さんが立ち上がった。

「そろそろ、晩御飯の時間だ……。本庄くんそろそろいこつか……。

」

僕はさっきの話を気にしつつ

「はい」

と言つて、信二さんの後をついて行った……。

第7話 長い夜の始まり

食堂では、もう皆席についていた。席の並びはお昼と一緒だ。ただ一つ違うのは、人数が増えているという事。

さっき会った、村木さんとその会社の人、3人の計4人だ

しばらくして料理が運ばれてきた。

僕達は、そのおいしい料理に舌鼓を打ちながら、話しをした。

村木さんの話しは、世界の歴史ミステリーの事で、すごく興味を惹かれる話ばかりだ。

しかもとても面白い話である。

ただ僕が、気になったのは、黒川夫妻の動向だった。

ぼくは、村木さんの話しを聞きつつちらりと黒川さんの顔を見る。

・・・

特に、おかしいところはなく、興味深く、村木さんの話しを聞いていた。

そのうち、話しが一段落すると

自己紹介が始まった。

村木さんのグループの唯一女の人、はすらつとして
一目みるとモデルをしているような印象を受ける。

名前は、

近藤 さき

インタビューだそうだ。

時々、月刊歴史ミステリー内にインタビューとして登場することがあるらしい。

そして、その横に座っている長髪の男の名は

加賀見 良太

というらしい。

村木さんのグループ内で、編集や、雑誌のレイアウトなどを考えるらしい。

そして、少し小太りの男が、村木さんのチームで、カメラマンをしている

河藤 健太

以上が、今回、夕飯から加わったメンバーである。

その後話しははずみ、浜田家の事や、みんなの調査結果の報告などを行った。

その中で、やはり、一番結果を出していたのは、めがね3人衆だろう。

書齋に行った事は、正解だったらしく、色々な情報を手にする事ができたらしい。

まだその事については、確証がないので、という理由で報告をしなかった。

その後も、話しは弾み、食事を終えても談笑は続いた。

そうこうしている内に一人、また一人と食卓から消えて行った。

僕も、恵と二人で食堂を後にした。

「少し、散歩しない？」

恵が唐突に僕に言った。

なんだか浮かない顔をしている。

「うん、いいけど・・・。」

僕は、特に断る理由もないので、恵の意見に同意した。

そして僕は、大きな門を開け、外に出た。まだ、夏は本格的に来
てはいなく、少し肌寒かった。しかし、確実に夏の足音は、聞こえ
てきており、においはそれを感じさせる。

僕達二人は、昼に歩いた道をなんとなくたどっていた。

「ねえ・・・。コータ」

恵が唐突に言う。

「どうしたんだい」

僕がすかさず言う。

告白かってすこし期待したけど、どうもそうではないようだ。

「私の事どう思ってる？」

恵が言った。

僕は、一瞬昼の事を思い浮かべたが、恵は告白できるような雰囲気
ではなかったのだ。

今は、告白をしない事にした。

「どうって？」

この言葉が、今僕が思いつく最適な言葉だ。

「うーん。なんていうか・・・。」

そういつて、恵は黙った。

・・・。

・・・。

・・・。

沈黙が続く。

なんだこの雰囲気は・・・。

ふーっと恵が一息ついた。

そして・・・。

僕が、後に思い知る事になるある言葉を口に出した。

「今、ここにいる私が、もし・・・もしの話しよ・・・。
実は、全然違う人物だったらどうする？」

・・・？

恵は、一体何を言っているんだ・・・？

「え・・・どうということ??」

僕は、言った。

すると、恵は顔を伏せながら、言った。

「ううん。なんでもない・・・。」

そっいつて僕を見て微笑みながら、言った。

「ごめん。さっき言った事は忘れて」

絶対むりっす・・・。

心でそう思いながら、特にそれ以上は何も言わなかった。

そしてそのまま、何事もなかったように

散歩を終え、部屋にもどった。

途中、玲子さんに会った。

玲子さんは、木田さんを探していた。

玲子さんは、僕にも、恵にも木田さんを知らないかと尋ねたが、特に、木田さんを見たわけではなかったなので、見ていないと答えた。

そして僕達は、おのこの部屋に戻った・・・。

一息つき僕は、ベッドに腰掛けた。

恵は一体何がいたかったんだろう・・・。

人物が違う人物だって一体どういう意味なんだ。

その時、ぼくの中で、パチンと何かが弾けた様な感じがした。

もしかして・・・。

恵が、となりの黒川さんが言ってた白狼か???

ってか、白狼自体何なんだ???

全く分からない・・・。

そしてまた、何気なく携帯を見た。

うん???

圏外になっている・・・。

おかしい・・・。

たしかに、今日のお昼は、アンテナが3本立っていたはずだ・・・。

少し僕は、部屋の中を移動してみたり、携帯を振ってみたりした。
だが、結果は一緒である。

圏外だ・・・。

何故だ・・・。

胸騒ぎがする・・・。

実際は何も起こってはいない。

また何かが起こるとは決まったわけではない。

だが、なんなんだ。

この胸騒ぎは・・・。

その時だ・・・。

キーーーーー

と急に頭が痛み出した。

ぐわつと頭を抱える・・・。

僕の心の中で、画像が見える・・・。
鮮明に見える。

女の人だ・・・。

女の人が立っている・・・。

その人は、こっちを向いて笑っている。

僕は、この人を確かに知っている！
だが、誰なんだ！！

次の瞬間、画像は、炎に包まれ消えた。

それと同時に僕の、頭痛も消えた。

ポタ・・・ポタ・・・。

地面に汗が落ちる・・・。

ほんの30秒程度の痛みなのに、なんなのだこの汗は。

僕は、顔の汗をぬぐい、ベッドに腰をかけた。

こんなのは今までで初めてだ・・・。

画像に出てきた女の人は、僕は確かに知っている。

だが思い出せない・・・。

誰だろう・・・。

もしかすると、喪失した記憶がもどろうつとしているのか？
その時・・・。

コン コン コン

部屋をノックする音が聞こえた・・・。

第8話 自室にて・・・。

コンコンコン・・・

ノックが聞こえた。僕は、ゆつくりとドアに近づきハイと答えた。

「ごめんなさい、本庄くん・・・ちょっといい??」

・・・。

・・・。

・・・。

玲子さんだ。

なんだこんな夜に・・・。

僕は、少し変に思いながらもドアを開けた。

そこには、胸のぱっくり開いたシャツに短パンというどう見ても、誘っているとは思えない玲子さんがいた。

いかんいかん!!!!

顔が乱れてないか???

必死で顔を作る。

「どうしたんですか」

僕は言った。

「ちよつと寝れなくて」

玲子さんはそう言いながら
髪をひねるように触った。

あああ

あああ

あああ

きれいだー！ー！ー！！！！

一瞬にして僕の心臓がはりさけそうなぐらい強く動く。

「ちよつと話出来ない??」

ぜんつつつぜんいいすよー！ー！！！！
てか、ちよつとその後を期待してしまったり
して・・・。

むふ・・・。

今ぼくの顔は気持悪いほど
鼻の下が伸びているだろう。

僕はなんとか平静を装いながら
「じゃあ部屋に入りますか？」

と聞いた。

すると玲子さんは
コクつと首を縦に振った。

シャンプーの香りがする。

なんてきれいなんだ……。

そして僕は、体を扉沿いに反らし

人が一人通れるぐらいのスペースを空けた。

そこを玲子さんが通る。

シャンプーか香水か……。

わからないがいいにおいがする。

そしてそのまま玲子さんは僕の脇を通り

ベッドに腰かけた……。

一度部屋を見渡す。

「ふーん……作りは私の部屋と一緒にね……。」

そう言ってから玲子さんは、僕の目をまっすぐ見つめた。

目鼻立ちがはつきりして本当に美人だ……。

僕は、少し、その視線を恥ずかしく感じながら

「何かこの屋敷についての謎はわかりましたか？」

と尋ねた。

玲子さんは、うーんと少し考えてから

「わかんない」

と言った。

そう言ってから少し間が空いた。

なんか話すことはないかな・・・。

僕がそう考えているところに玲子さんが口を開いた。

「恵さんとはうまく言ってるの」と言った。

え・・・。

僕の脳に恵の顔が浮かぶ・・・。

恵・・・。

そう思っているところにまたあのいいにおいが流れてきた。

いいにおいが、鼻先を通る。

僕は、一瞬、何やら、ふわふわした気分になった。いい気持ちだ・・・。

「恵とは友達としてうまくやってます。」

そう言うと、玲子さんは、ぷつと吹きだした。

「別に、友達を強調しなくてもいいわよ」と玲子さんが言う。

そんなに強調しちゃいました??

僕は、再び恥ずかしく感じながら顔を伏せた。

「ねえ、横に座らない？」

と玲子さんは、言いながら

少し、体を横にずらした。

そうすることで、玲子さんが腰かけていたベッドに一人ぐらい座れるスペースが空いた。

僕は、そこに、少し戸惑いながらも腰かけた。

一層においが強くなる。

少し、頭がぼーっとする。

僕は、ぼーっとしながらも

玲子さんの方を向いた。

玲子さんは少しうつむき加減に座っており、
ぱっくり開いたシャツからは、

いい形そうな胸元がのぞいていた。

ああ！！その胸に飛び込みたい……。

とそう思っているとなぜか胸がどんどん近くなってくるような
感覚に襲われた。

うん？？？

どんどん胸が近づいてくる。

な……なんだこれは……。

そう思い、僕は、必死に今の現状を考えた。

ぼ．．．

僕が胸に近づいていつている！！！！

だめだ！！だめだ！！！！

．．．。

なぜだ！！！！

今まで、こんな感覚に襲われたことはない！

明らかに、普通の人間ではありえない行為をしようとしている。

頭が．．．

あ．．．たまがぼーっとする。

体が．．．。

体が．．．。

なぜか、体が止まらない！！！！！！

とまれーーーー！！！！！！

体が言うことをきかな．．．．い

すごく気持ちがいい．．．。

僕は、胸が近づいてくる中、

ふと玲子さんの顔を見た。

．．．。

玲子さんは、なぜか、顔に笑みを浮かべていた．．．。

第8話 自室にて・・・。（後書き）

長らくお待たせいたしました。今後は、定期的に書き込んでいきますのでよろしく願います。

第9話 夜、廊下にて

・ ・ ・
・ ・ ・
・ ・ ・

ん ・ ・ ・。

胸 ・ ・ ・。

胸 ・ ・ ・。

ん？？？

なんか感触が硬い。

なんだこれ。

手を上下にさすってみる。

サシユサシユと布をさする音が聞こえる。

胸じゃないのか？？？

この感触はあきらかに胸じゃない・・・。

そう言つて少し考えたのち状況に気づいた。

枕か・・・。

くそ！！！！！！

最悪だ――！！

枕と戯れていたのか！！！！

そして僕は、少しやりきれない気持ちで目を開いた。
真っ暗な中に、机が見える。

今日のお昼に腰かけた机だ。

当然のことだが、部屋は何も変わったところはない。

僕は頭を抱えながらゆっくりと起き上った。

ズキン……。

少し頭が痛む……。

よく寝起きるとき、脳が起きていないせいか
少し、頭が痛む時があるが
それとは異質のものだった。

その瞬間、

急激に頭に電撃走ったような痛みに襲われた。

僕は、たまらず、頭を抱え込んだ。

僕の脳裏に何かが浮かぶ。

女の子だ。

何歳ぐらいだろう……。

泣いている。

次に場面が変わり

突如火が現れた。

その火が僕の周りを包み逃げ場をなくす。

やがて、火は大きくなり、炎となった。

それはまるで生きているように、僕の周りをつごめいている。

そしてその火がまさに僕に襲いかかろうとした瞬間

今までが、嘘のように頭痛が消えた。

そして僕は、額に汗が溜まっているのを手でぬぐった。

なんだってんだ。

僕の頭の中では、何が起こっているんだ。

あの女の子は一体誰なんだ・・・。

そして僕はふとシャツを見た。

濡れている・・・。

そこには、暗くてよくわからないが

何やら、どす黒い液体がシャツを濡らしていた。

なんだこれは・・・？

僕は、それに少しだけ触れた。

手にどす黒いものがつく。

その瞬間

僕は、そのどす黒いものの正体に気づき

さっと飛び起きベッドで

けつまづきそうになりながらも電気をつけた。

やはり
血だ・・・。

そうそのどす黒く見えてた液体は
実は、赤黒くまさしく血そのものであった。

僕は、そう思うや否や、いま着ていたものをすべて脱ぎ、
何か、けがをしていないかどうかを探した。

その結果

どうやら、僕の血ではないらしい。

僕の体には傷一つなかった。

ではこれは、誰の血だ??

この量から察するに相当血が流れているように思う。
ちょうどその血は、僕のシャツ全体を大きく濡らし
ベッドの方にもびっしりとおついていた。

もしかして、玲子さんの血か???

僕は、少し、ベッドを見たあととりあえず新しいシャツとズボンに
着替えた。

そして、頭を抱え、イスに座りながら
今の状況を考えた。

さっき、玲子さんが訪ねてきて・・・。
ベッドに座り・・・。

いいにおいがし・・・。

そのまま僕は、胸へ・・・。

と僕は、とつさに時計を見た。

今何時だ。

玲子さんと会った時は、確か、そんなに夜遅くもなかったように思う。

大体10時くらいだろうか？

今は・・・。

1時だ。

そう考えると

僕は約3時間意識がなかったことになる。

3時間も・・・。

僕は一体何をしていたんだ。胸が近づいてきて・・・。
そこからの記憶がほとんどない。

僕は、しばらくじっと考えていたが
答えが出そうになかったので
とりあえず恵にこの状況を話そうと思った。

そうして部屋のドアを開ける。

外は真っ暗闇で、何も見えない。
たしか恵の部屋は隣だったはず・・・。
黒木さんはもう寝ただろうか。

今日の夕方の、ドアから聞こえてきた奇妙な会話を思い浮かべながら、ゆっくりと歩を進めた。

ギ・・・。

ギ・・・。

なるべく音を立てないようにしているが

二階

廊下部分は木でできているため、木がきしむ音がする。

そして

ほとんど何も見えず

手を前に、探り探り、ゆっくりと恵の部屋の方へ歩いていったが、ついに左の壁にドアノブと思われる突起物を発見した。

それを僕は、一度二度とさわり、形がドアノブというのを確認するとノックをするために、右手を軽く握った。
そして、ノックをするため少し手を引いた。

その時・・・。

ギ・・・。

ギ・・・。

ギ・・・。

どこかで、二階の床を歩く音がする。

その音から察するに向こうもどうやら音をたてないように歩いているようだ。

僕は、その音が聞こえるとともに反射的にかがんだ。

音はどこからだ・・・。

僕は、かがみながら
左右を見る。

影が確認できない。

僕は次に音を、便りにどちらから聞こえてくるかを確認しようとした。

・・・。

僕の部屋とは反対の方からだ・・・。

・・・。

・・・。

だがよくよく考えてみると

そんなにびっくりする必要がないような気がしてきた。

ここに、いるのは、僕たち以外にもたくさんいるし

ましてや、トイレは自室についているものの廊下にもあるので
なんらかの理由でそちらをとおうとするのは

十分考えれることでトイレに外に出るという考えもあった。

そして僕は、意を決し

「誰ですか」

と、少し震える声で
声を発した。

それが床を軋む音を出している相手に聞こえたのだろう。
床がきしむ音が止んだ。

だが

次の瞬間

びゅん

っという音とともに僕の横を何かが高速で通り抜けた。

！！！！

僕は、少し痛みを感じ、ほほに手をやった。

血だ！！！！

そして、高速の物体が飛んで行った方を一度見る
だが暗くて何も見えない！！

また音が聞こえる。

ひゅっ

ひゅっ

ひゅっ

三つ立て続けに聞こえたあと僕はとっさにドアに密着し身を、
なるべく廊下にださないようにした。

カッ

カッ

何かが廊下に刺さる音がする。

キンッ

ひとつは、壁に当たり、高い音の金属音を出した。

僕は、身をかめながら、その床に刺さっているものを見る

！！！！

ナイフ！！！！！！！！

なんでこんなものが！！！！！！

僕は、床に刺さっているナイフをみ、完全に今の状況を飲み込むだけの

思考力……。冷静さを
持つことができなかった。

僕はとつさに立ち上がり、恵のドアノブをひねった。

ドアは以外にも鍵が閉められていなく
僕は、部屋の中に転げるように入った。

そして急いで、ドアを閉め鍵をかけた。

そしてベッドに横になっているだろう恵に声をかけた。

「恵！！恵！！起きろ！！」

。。。。

・・・。

・・・。

反応がない。

僕は、しょうがなく力づくで恵を起こそうと考えた。

「恵!! 起きろってば!!!!」

そっぴいっつ

掛け布団を勢いよく引っ張った。

!!!

いない!!!

だれも!!!

そうそのベッドは、だれも寝ていなかった。
また使った形跡も残されていなかった。

そ・・・

そんな・・・

どういうことだ・・・。

僕は、もうわけがわからなくなり、ドアを背にしその場にしゃがみこんだ。

どういうことだ!!!!!!

恵はどこにいったんだ！！！！

てかベッド自体全然使われてねーじゃねーかよ！！！！

どうなってんだよ！！！！

ここに来てから何かおかしいことばかり起こる！！

はじめは、僕の考えすぎかと思っていたが

どうやらそうでもないらしい。

そう考えているところに

ギギギ……。

……。

……。

ちょうど横の……。

そう……。

僕の……。

つまり

僕の部屋のドアが開いた音がした。

僕は、ドアにへたり込みながら

恵の部屋から僕の部屋がある壁をとっさに見つめた。

誰かが……。

誰かが……。

僕の部屋に入った！！！！！！！！

第10話 夜、部屋にて・・・。

誰かが・・・。

誰かが・・・。

僕の部屋に入った!!!

僕は、とっさに耳を壁につける。

すーはー。

すーはー。

自分の呼吸がわかるくらい動揺しているのがわかる。

ぎ・・・。

ぎ・・・。

ぎ・・・。

部屋を移動している。

とその次の瞬間、

ドス、ドスという音が聞こえた。

何をしているんだ。

そのあとまた部屋を歩く音が聞こえた。

ガサガサ・・・。

なにやら布をこすり合わせたような音が聞こえる。
そのあと、おもむろにゴトツという音が聞こえた。

・・・。

・・・。

僕の荷物を探っている！！！！

いったい何者なんだ？？？

そのあと、鈍い何かが壁にぶつかった音が聞こえた。
そしてまた何者かはゆっくりと部屋を歩きだした。

その音は一通り歩いた後、部屋から出ようとしたのか
ドアを開けた。

僕はあわてて、ドアの方へ移動した、そして、また音が聞こえる。

音は向こうへ行った・・・。

・・・。

・・・。

・・・。

いや・・・。

ギ・・・。

違う・・・。

ギ・・・。

音は・・・。

ギ・・・。

ギ・・・。

ギ・・・。

こっちへ来ている!!!

僕は、あわてて部屋を見渡した。

窓がある・・・。

窓から逃げよう。

そう思った僕は、急いで窓に近づいた。

そして下を見る・・・。

だめだ!!

下にはちょうど農業機械がおいてあり、
それが着地地点をふさいでいるのだ。

もしこのまま飛び下りれば、大けがをしてしまう。

その時だった。

ガチャ、ガチャ・・・。

ドアノブをひねる音が聞こえる。

んー！！！

危うく声が出そうになったのを
自分の手で必死に抑える。

僕は、死ぬのを本能的に覚悟した。

ガチャ・・・。

ガチャ・・・。

ガチャ・・・。

三回ぐらいドアノブをひねった後、音が止まった。

そして、

ドン。ドン。ドン。

と強くドアをたたく音が聞こえた。

僕は、この奇妙な状況を飲み込めないながらも
今、命の危険にさらされていることは本能的に感じた。

ガンー！！ガンー！！

続いて、二度明らかにドアを壊そうとするような金属をドアにぶつ

ける音がした。

・・・。

その時だった・・・。

ピシュ！！

ピシュ！！！！

と空気が抜ける短い音がドアの外でした。

連続してドン！！とドアに重いものがぶつかった音がする。

そして、何やら外で暴れるような音がした後、

その後、なぜか足音がどたとたと遠ざかった。

なんだ・・・

僕は思う。

すると、ガチャガチャとドアノブを誰かが回そうとする音が聞こえた。

なんだよー！！！！

まだ終わってねーのかよ！！！！

そして

カチリ

とドアの鍵が外される音がした。

こいつは鍵を持っている!!!

そう思った僕は、死を覚悟した。

「コート大丈夫???」

そこに立っていたのは何と、恵だった。

僕は、まったく状況が飲み込めず、ぼーっと恵の顔を見た。

「なによ!!!その死んだ人を見るような顔は!!!!」

そう言って恵は、ドアから顔を出し、外の様子をつかがった。

そして、こちらを向き直り静かに言った。

「こうなってしまった以上、コートには全部話をしないといけないわね・・・」

と。

その後僕の腕を持ち、

「ちょっと来てちょーだい」

と言った。

僕は、キツネにだまされたような顔つきのまま、恵に腕を引っ張られるままついていった・・・。

第11話 夜中にて

恵は、そつと自室から足音を忍ばせるように外に出た。

僕も、それに続き、そつと外に出る。

今まで感じなかったが、少し暑い。

恵は少し前でしゃがみこみながら、暗闇の中をゆっくりと左右を確認しつつ進む。

僕も恵の後を、ついていく。

恵は、片手をすつと前に出し、その手になにやら握られている。

・・・。

・・・。

・・・。

銃だ！！

僕は、にわかに信じられなかった。

だって、ここは日本だ！！

いくらなんでも、最近、日本の安全神話が崩壊したといってはいるものの

銃社会ではない日本では、まだまだ銃の普及率は少なく、銃を持っている人はごくわずかである。

また、日本では銃での犯罪よりも、刃物や鈍器などの犯罪の方がはるかに多い。

そういった意味でも、銃というのは日本では馴染みがない。

その中で、目の前の恵が・・・。

今まで、よく遊んできて、今一番身近にいる友達ともいえる恵が・・。

なんと、銃を持っている。

正直に言つて、通常の日本人の常識としてはありえない状況ではないだろうか。

僕は、本当に状況を飲み込む事が、一部さえも出来なかった。

・・・。

だが・・・

よくよく考えてみると僕は、恵の何を知っているのだろうか・・・。

知り合つたのは、事故の後で、月日で考えるとそんなに深くない。しかも、いま思えば、彼女は僕と話すとき、ほとんど仕事の話しかしなかったような気がする。

当直のときどんなことが起こつて、だとか、患者さんにお尻を触られたなど

そんな話ばかりだった。

・・・何かを隠していたのか???

そして、一緒に遊んでいるときにするふと悲しそうな表情も

その時は、僕と遊んでいても面白くないのかななどと思っていたが今考えると、何やら、面白くないなどの単純な理由ではないような気がする。

あれこれ、考えてみたが、

現実にも、恵は銃を持っている。

また、持ち方などを見ていると使い慣れているような気さえする。

僕は、そういった事実を、弁解のしようもないように見せつけられ僕は恵の事は何も知らない、これでもかというぐらいの衝撃で気が付かされた。

僕は、これはいいことか悪いことかそれさえも判断する事が出来ないほど頭は混乱していた。

ただ・・・。

恵の事を何も知らないと気付かされ、心の中に何やら、落胆と形容すればいいのか、空虚と形容すればいいのか、そういった不快な気持がじわじわと広がっていく、それは感じる事ができた。

またそれと同時に、恵の事を知っていると思い、浮かれていた自分にも腹が立つ。

とにもかくにも、恵は僕の部屋の前で止まった。

「コータの部屋に入りましょ」

恵はそういうと、ドアを静かに開けた。

中に、恵が入る。

続けて僕が入る。

そして、部屋をぐるりと見渡した。

!!!!!!。

なんだこれは!!!!!!!!!!

ベッドが散乱している。

だがよくよく見ると、ただ散乱しているというわけではなく、シーツの中身が出ていることから察するに
なにやら、刃物で何度も刺されたような感じを受ける。

また荷物は、壁に投げ出されたのか、壁側に散らばっている。

僕は、その場に立ちすくんだ。

「コータ、とりあえず必要なものだけ持って」

恵は、そう言っ僕に、手持ち用のバッグを胸に押し当てた。
僕は、それをゆっくり、手に取った。

なんだってんだ!!!

まったく理解できねーことばかり、起きやがる!!!
本当にどうなってんだ!!!

そう思っていると、恵が言った。

「時間がないから早くして!!!」

そう言われ、我に帰った僕は、とりあえず服など身の回りのものを
カバンに詰めた。

「終わったよ……」

僕は、静かに言った。

「そう……。じゃ、行こうか」

恵が言う。

そして、また静かに外に出た。

廊下を体勢を低くし、ゆっくりと階段の方へ進んでいく。

そして、真つ暗な階段を一段一段降りていく。

そのまま、一階におり、

建物の中央の方へ、進んでいく。

ぼうつと騎士の鎧が外の月明かりを受け光っている。

僕は、その騎士に不気味さを覚えながらもその前をゆっくり通過
ぎた。

そして、ひとつのドアの前で恵は足を止めた。

恵は何もためらわずゆっくりとドアを開ける。

・・・。

見たことがある大きな机が真ん中に置いてあった。

食堂だ・・・。

机の周りには、きれいに椅子が並んでいる。

恵は、

「こつちよ・・・」

と言いながら、机を左に見てまっすぐ進んだ。

そして、

暖炉の前でその歩を止めた。

恵が急にとまったので、一瞬、恵にぶつかりそうになった。

「ちよつとまってて。」

恵はそう言つと、周りを見渡し

僕たち以外に誰もいない事を確認すると、

暖炉の木の一本についている突起物を、ぐっと押した。

すると、なんと暖炉の木が音もなく左へスライドし始めた。

それに続き、床も音ひとつなく左へスライドを始めた。

どつという構造になっているんだ・・・。

スライドが止まると中からは、下に行く階段が現れた。

地下室か・・・。

そういえば、浜田財閥の謎のひとつに地下室があつたな。
ここがそうか??

中は、真つ暗で全く見えない。

階段だけが、薄く月明かりを反射し浮き上がっている。

その姿はまるで、冥界へと続く階段のように見えた。

少し、僕は、不気味さのため、寒気を感じながら、恵が階段を下りて行つたので
それに続いた。

階段を下りるとそんなに進まないうちに、鉄の扉が見えて来た。

その鉄の扉は、最近に作られたのか、汚れが少ないような気がする。

恵は、その扉の前に立ち止まると

「私よ・・・。あけて」

と言った。

すると鉄の扉が、奥からゆっくりと開き
中から、白井さんが出てきた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3074e/>

白狼

2011年4月21日06時23分発行